

0 1 2 2^m 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7

JAPAN Tamaia



5

錦川古文書

新編
古文書

八



能詣古とね差之下

再校東文式序

蓮二房

じよりよりの走りとよと仰承のせよ
虚辛くともあらずかう御善と憐陳如の
宣工はやう儒書の口万年章も宣子く
そくどくへあくへ懲惡と縷悲すう虚と
歎慨とくとも時の要とぞとて虚と虚
ハ實も實もあくとぞとぞとぞとぞとぞと
あくへらへ能詣のろうちや和子連二房の序

と波多うもんとおまともととがまくらと
アトモトハセトヤウトモヤト財の様嬢と
をもいて二丸のぼとくあつと傳仰のと
ハセトヨリ連能の家トカカ近トヨハツ
レニミタ自在あれハセトニ丸の設とくよ
ヒセトニ一再と反吉手の附録とアリ祖廟
の生前トアリシテ五正月の設とアリ
ハセトヨリ一通の例とアリ生前トモハツ
モトアリセテ古事記アリシモトモハツ
の事トモハツお節と月の設トモ

まこととて同録トモハタア祖廟の遺訓
あるねと○は白居とアリヤドヤ今オモテ所
の新製あるねと△け白角とアリヤドヤと
二様を取捨トモヒアレルやハカ一種
の設とアリセキトハ孟子トノ難向とヒカ
ヒト不道の罪とアリトモヒムトヒタヌと
あひては後ト直る一トモトモ吉のぼとアリ
ちもじ天下トアリアリ叶々宣室をかか
西成敗とうる刑罰のとわくあよ人あくらは
孝とひ刑とよおほの名同ニ宣とセキ當然

のにとちづくすあてつもあらうと禪家の向をよ
殺^{レフ}文^{レフ}殺母成佛否^{ヤハ}と向よ自己^ニ返照^{シテ}看^ヨハ
成佛不^{レハ}成佛^トか^{レハ}て^{レハ}是^モ父母^トこう^ヘト^ハ
あ^リう^トのう^ト向^よて^アト^トモ^僧のば^ハ言
と^トモ^トや^アト^ト儒者^ト實^スト^モ不^ス言^ハ
事^トは^クト^モあ^ハト^モ佛^ト實^スト^モ不^ス言^ハ
自在ありとるり^トも^ト儒^トの祖^トあ^ハれます
ハ^シ寧^ヤう井^にの^新尚^モも^トす^貢方^人
の釣^語と^トあ^らま^トも^ト人^の辨^ハと
えう^シが^ハりて^モ儒^ト佛^トの^事と^例の^事通

自在ありとやうべる^トにある事^トも^ト禪^ト
禪^トき^カ爾^トら^トも^ト公^開と^作は^トと^そも^有
つ^モ視^聽言^教の^事あれい^教と^も用^ときる
時^モも^もも^もの^時自^トも^もも^もひ^トか^ト其^ト
の^事と^わざと^あり^トと^あれう^る事^トも^トも^有りん
き^トひ^利便^益の^五化^トも^トあ^れう^る事^ト一^失せ
念^ト入^る事^トも^トあ^れう^る事^トの^五化^ト
フ^年九^年の^事と^そろ^人も^トよ^りき^みの^事の^事
あ^んと^やけ^る事^ト我^翁と^万釋^一次^の釣^語と^あ
一^次と^一次^の寒^説と^う近^く一^次の寒^談

と窓ひ遠く瓦せのぬ盤よやくよと我詳
おそれてはともじく詳よにあくとおそれ
らんやうとすま保巳爾の秋ハ月十六日け
序文とまわるて文曰觀の塔前よ教
ア董誦再わむらむちもくセ

一花ノ様せ事

東菴式同錄

大段十二箇條
小段五十五條

- 辛夷のをゝ山桜のす ○花ノ様人のす
- 新葉ノ鯉の様のす ○猿裏葉ノ年桜す
- △唐生野野ノ様のす △様ノを早つす
- △岩根の花ノ様のす △二句一意の花せす
- △春秋の花ノ差ふのす

一月に日と星せ事

○宵萬月と申す。○是名七月のす

○是月ねせ設のす △嘗て月日空のす

一 ニ泊月せ事

△前句より月といひゆるす

△月よりあ向すむれす

一月せ二字よ詮見の事

△月とよすとかくもす

△月とよすとあくもす

一 儀式の席よ奉向せ事

△一宇のひよモ名のす △面白頬白のす

○屏風のたよ草子盒のす

一 當主よ物名せ事

△玉ぞ美形容のす

△核半指のす

一 至二字よ詮せ事

○直云き詮附合のす

△は取のばくせす

一 起向一よ向作させ事

○辛夷のねよこ様のす

△篆入よ曲筋地のす

一 附合トコトコ七名ナナメハ躰コトハ事

○ 有心ウツル 會イシタリ 通スル 向カミ 起情

○ 向附カミツク 桃子モモコ 色カラ

右七名ハ寢方ニシテ對附ハ眞外マツガイアリ

△ 其人ヒト 具場ヒツマツ 時分ヒツブ 時節ヒツセキ

△ 時宜ヒツイ 天相テンサク 觀相ケンサク 面影モンヨウ

右ハ躰コトハ附方ニシテ空接スルタタキハ眞外マツガイアリ

一 懐モロコシ帛モロコシよ名メイ同ドコロ比ヒ事

○ 百韵ヒャクヨン 七十二候セトニイ 津氏ツシ 五十韵ゴトヨン

○ 四十四ヨンヨン 章仙ショウセン 肩尾吟カミツクイヌ

一 求韵ヒヤクヨン 向カミ教タチ比ヒ事

○ 津氏行ツシノハシ ○ 章仙行ショウセンノハシ

△ 長歌行ロングソング △ 短歌行ショートソング

一 同ドコロまマハ二向ニカミ去ムカシ也マ比ヒ事

○ 一章仙の遺訓イニシヤのイシタリス二花二月の例スルモノアリ

○ 各彌ミの裏ミツと春秋コトハフ二句の例スルモノアリ

古とお序同終

新製東菴式

星五

一方例序

東菴

はらく古今の比承とよし仰承と承通別圓
はあれ儒書と礼承書の承あつてかこゝを
ス古の戒律とさへしてそくすせ威儀とす
もも金ともんとゆふよ人の儀りの傳承よ
まやく墨書の功とはくと承とすとま
時とろと縱横自在とくちうと薦離らぐ
行きあをとせん人の普通とすとまよ

あるとされへを毛揚きのころばく連能
とあもよへしむる史公書を宣へあくよ族とも等と
あれどもとひそ等と多くこれへ下すと
名へよう生かのがほぢり一トせんやハテ不辭
へ走家れ行のをよそからて齊楚のじうに
各とはくせんと五倫の文とやづけてニ子慶
の名りとあくよまくへざめの有はとあひて又言
せきの下へはくと百韻の式せきかくすると
すとく余年よくるひんもく書行へがねと
えひてセキの優情とせすうとくあ和よ

ハシ能造といひうやう林やのねまとかまくらを
あられとよもんてはとらわやまとまつてお山
のせき言ふ船觸つて食生の御傘といひうまと
一うちれも運舟せふ家もへん安の新式
と録歌とあさりより例と書かばのちらへあ
フ一牛すアヤキモヒアガナリゆておつよ
能造ハ八十一年年の新創製つて能造のたと
えとふあられとよもんの御馬店とて
指令も様のばとまつて古式の論をくるわ
あまへりてせれと二種の設とてあらへ

ねみのよしよしといへてもくせ設おひやわとせ
記向の廉子すよめい一或の書神の実まと生
いて後工時記よしよかくげくやせんち
え様の中比より寶永の軒やとよねみのまと生
と齊ひあつまつ一當神のはずとらむまくる
あし又きとかくのとくとて梅またハカカラ
一あくやと一ノ木と例の一むすつてきとくわされ
ともる)さればまつて木目地大はかとあけつめ
直方木の附録ととをあくまうや津とある
おまへ連船の手エーと建立の行とかまく

おまの身よ子と俳諧へ言徧うてほけりや
俳諧へん徧うてほけりやれへばすと今や
ふ製衣あるとく汝が居のふ用よめあんぐと
月に雪きたをもむじゆくへよあへた月く
あくべたもせきとよせ詔あんじよせれまく
新式の本懐うつて敷様のはせうもくと同辨
ふ用の用とあれとや恵時寶永乙酉の
十月十二日故翁の靈前より行持とさしけて燃灯
折菴の信とほくへて瓦世の真後と喜玉也
まよすのや

新製衣東女ヒホ

○花よ桜せ事

おひくいん新よ身のよとこまよと春秋の
糸物といひもとすもよせ飾られへせばれ
五節よあそびて例の辞美と潤うう
テとくやうと新奇と求へるをとせや
白鳥の遺訓あるやちうるに連説のちは
とり花よ桜と隣りすと桜ふく様頬とも
是名ふう失がの物とりてもと桜の差ふ

とあむれとどめくとくと
ハシトトと自らもあすれせしゆ一冊と
故ふよこたわれ句とあり次よ秋葉の
鴉鳴とありさて百世の設て候あんとモ
例の寔譲て用捨ミ

○ 辛夷のねじをより脉と
山桜とあはる まつみ

ひ春向へ湖南のまきらすて今とく句と
近きるゝ又下とちうにけ脈の山桜と玉筋の
寒涼と山崎とともとひじまと山桜と

う花と桜のふ様とあわとせ便いもしげ
ハヒテせまめ山桜とアラト

○ 詠うう花とアラト その骨
ひげてゆる 山桜と人

は二句と櫻林の神詣セアると中古せ次約
主此の詣およ古はく（主はく）例の古の云
あれハ今お能詣の論（なまこと）は山桜と
信重家の名目あらそと人と若きをとよると
もと桜せんかあんりあつて花と桜のさ
不承の御詣とアキモセ

○ 番句 あめのむとをけも鶴も様もふ

○ 花度 郡としものを盡せ 一ノカ田

二鳥 さうづく やす 菖の花うに

花度 楊脇一もいよ笑ふより

け写りをなみの邊訓せふの様と來集せ番句
コトハか折の花に花すよ花あへ後の様い様裏
集の附人乞うてか折つてと花あうて今比
多様を名残の曲節セある日ある日と四竹
又何うて系詠上げ二集の接承とさうれり詠
ハ例の若ひくすとや我家めの花論と花を

様もあても様もあてもよほせととを言葉不到
の所ねうてはよだとつと松詠よほもニニ
子あだまよちるやはまたもう一ノ林家北
能活集と天和めじよ活觸さう冬のひも月
ら論くとよも姿情をおよせ新集みづれ
て花実とはさに様裏集よどきあらうと
けじの巣集と変化の中よ曲が歸すて能活
がくこまともう一ノ林家北様裏の大任
多様の差と一部の差を紹といひ二集北撰者
の向あんじうとまに名残の曲節とす一ノ部の

虚實とありふましや余様と例の秘訣す
てまた角りと文章比優游ありとぞ

△名前 われうそ芳節とく岩と牡丹外

△花名 我國のそとひらへ咲くまほ

ひるめとお節のあすう完あまた岩と牡丹
とがくらむれ御の金賛やさると新妻の質
とあつともせ能滑へ風りきにゆ新の
花とくじりてをよし様のえすと用やと設
いもとあれハ和漫と花玉あくまひりてお和
のすううな様とよし諸藝のけり牡丹と岩

ハよしよしとせ芳節とよし様へかくて牡丹哉と
岩せとすよ津半枝とよけざるは全く花玉と
ちるやまうぐ花とれよひうて我國のひらへと
稱とらんやこれとく風雅のこせうて早春
ハ牡丹とく様とよ心詞の花とよすまや但丁
諸藝とく牡丹とよく風雅とよすまやて百花のとく
と咲きよしよりそと岩あくまひりてお和

△花名 置くらひとく様と併達の要なる哉

△名前 入達すすと岩と花とよすまや

と咲き外の處とよ和すよあくまひりてお和

スリの事と云ふもさうかさうやあらにこそ此の
花はよつて例の対訳と対す様よなを
論あれとまことに單とよ詞ともありて様よ
ひあくまくへ多句よたゞとゆくをいはけ時と
モ様の序をとどまつてまたの対訳は
一決とり便つらむ尾とおとよひの印の二つと
摘要されと連音せ能活と云ふ

△ 稽子以テ是をわざを考えても云ふ
け多句と山中即事あり也テ多卷の花に對し
てうす例の対訳と対すと云ふをよ花

つて清アト本風にレヒトアヤヒト例の各とひな
をあれハまよ様やもよヒトヨウカアキ様のニキ
ミモリヤ他ノモ皆竪毛のとき様のるとひよ時
も何アヤヒトモヨヒヒモタクのアヘモト

△ 附句
前句の語をより良きとしてす
肩衣ヲモリテ有ハセと捨て

け附合ヒ越の新字トテ鑄字のセ里ヒニシテ
事ハセラレハ事ハシヒシヒヒニ折の花子ト有
も附合ヒ同作の句アリあれハ名音の裏ヒニシテ
時エ例ハ花度とかアヒトアヒトアヒトアヒトアヒト

トモアリト同作のをとらむるにモウシテシモレ
シヨモシト一解近^{タカ}トヒ席とゆ^{タカ}ケテ船^{タカ}平^{タカ}世
の仲とシモシムシモシトシヤウガニキトシヤ^{タカ}シモ^{タカ}
く草^{タカ}モシモシ^{タカ}シモシトシテおあへ絲^{タカ}席^{タカ}の花^{タカ}あん^{タカ}
今セシモシ^{タカ}シモシ通^{タカ}アシモシヤ^{タカ}而^{タカ}世^{タカ}の花^{タカ}あん^{タカ}
シテ花^{タカ}の同作^{タカ}トシテモシモシ同作^{タカ}シモシ^{タカ}
モシモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}
シツヒヒ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}
シツヒヒ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}シモシ^{タカ}

△前句
云^{タカ}園^{タカ}ひろ^{タカ}く穴^{タカ}井^{タカ}ちうも

ヤマ^{タカ}けニ^{タカ}花^{タカ}の^{タカ}郎^{タカ}ほ^{タカ}ト百^{タカ}韵^{タカ}トナ^{タカ}リ^{タカ}解^{タカ}す^{タカ}
祝^{タカ}言^{タカ}哀傷^{タカ}の儀^{タカ}ホ^{タカ}シ^{タカ}み^{タカ}白^{タカ}作^{タカ}有^{タカ}各^{タカ}種^{タカ}の
花^{タカ}と^{タカ}シ^{タカ}む^{タカ}ら^{タカ}シ^{タカ}も^{タカ}事^{タカ}お^{タカ}始^{タカ}終^{タカ}あれ^{タカ}ト^{タカ}モ^{タカ}
各^{タカ}种^{タカ}花^{タカ}あ^{タカ}い^{タカ}極^{タカ}あ^{タカ}い^{タカ}各^{タカ}种^{タカ}の花^{タカ}と^{タカ}モ^{タカ}
モ^{タカ}ギ^{タカ}シ^{タカ}れ^{タカ}と^{タカ}シ^{タカ}二^{タカ}の能^{タカ}活^{タカ}と^{タカ}シ^{タカ}す^{タカ}て
二^{タカ}の^{タカ}二^{タカ}折^{タカ}あ^{タカ}い^{タカ}解^{タカ}ハ^{タカ}か^{タカ}も^{タカ}一^{タカ}じ^{タカ}ね
コ^{タカ}今^{タカ}お^{タカ}事^{タカ}モ^{タカ}不^{タカ}と^{タカ}も^{タカ}解^{タカ}ハ^{タカ}か^{タカ}も^{タカ}一^{タカ}じ^{タカ}ね
ト^{タカ}あ^{タカ}一^{タカ}花^{タカ}ハ^{タカ}一^{タカ}と^{タカ}ト^{タカ}一^{タカ}れ^{タカ}例^{タカ}の^{タカ}最^{タカ}と^{タカ}有^{タカ}一^{タカ}と^{タカ}
△後句
花^{タカ}ユ^{タカ}ま^{タカ}相^{タカ}蝶^{タカ}や^{タカ}る^{タカ}の^{タカ}魂^{タカ}ま^{タカ}ス

け設を越の井はうてよまにとす草とえひす金す
のえ名とあけて一ひくすも魂とまづかる美輪
北百韵うわうされり翁向と意すうてはく
秋のもわれく向花うそりてばまむ胡蝶とれて
つけ花の宿とまれり後の花と全くまことよ
「あれの花」うる胡蝶と二句一との格と似あ
うるこの花の洞とがうてけ花とくじるわれ
胡蝶の花せせ用あら寝の花せせ用あら松と
まことせ差ふとあら「一室にそひはまゆは
被ふす千例万格うつけの指合去輝ひ

よし射の用とアマアマアマアマアマア
セシカヒ例の事通ちる事

○月に日と星と事

むぐぐぐ連歌うした月と百韵うへあわいを
くわわあくて不あせかほりかほる「一」や
よくひとひきとくつ天象のま縁と月よら
百よひげども月次歌の詞とへ作者と和歌
もす隠も時とあんじとくとえよのとて
正月附の句と序も「をもあはへせねよ

先格の句とあけて當時の設とあらしもと
言ふて月をよそうておみと見見の句にあ

○ 肖園をあらゆる神の文選

小より萩也

凡セトモ

レ肖園とせよはとくて取るゝ見るの設あ
是と辛ひの七八月とて例の月秋と新秋へ
け寒まひ秋まどもさに十六七の肖園す
唯今七八月の附かざれり寒まひ神の風景と
萩と向葉とのをとまも時の念ねせされ
青園の打跡と月のあらひの持よもりかく

内とてナ月月と月とあらひ辛ひの秋ま
やあく花よの月とせ念あんと見見
の句にとめられて

○ 八月と旅あらうまく小幅錦

三よ旬をかかず秋の合とどきとひをかく
月のまとあらまじあるやむとすと肖園
の萩と唯今八月せ而秋と會すと月とす
とちとむとむとくとひをもニも二月のをれ
とい近づくと高祖の御用とつとまでもうとも
せまの設をねるよ例の裏通あらひと我らゆ

古今機智錄

卷之三

子有もひくね
アモヤリテアモ
トシル内アリトツル仰スルの奥魔
アリタアリセヨカルモニキト前メハナアリ
アリシロタガトナマジヌシノシテアリ

六月廿五日
天晴
風和日麗
氣溫
約二十二度
有風

多々の連絡の爲めに常取の事は勿考
あはれてる向うへも合ひ何へも
少く思ひがちと云ふ所より是の
説論あれど連絡の事はさういふ事は
多々あると既に

もよよと盡のれとすと月をあきらむと御言
うて今よりあくとあくと大式の設けに
せきとよれども歎と嫌ひて簡略と嫌ひ
はくと例とせりちうへ記とくとくとくと
實制とす一卒竟とさる改め七論子
骨カギツ而と月と嫌カニタレと骨カニタレ而と月と嫌カニタレ
と自同の事とまることもとくとくとくと
筋カニタレ而と月と嫌カニタレと筋カニタレ而と月と嫌カニタレ
筋カニタレ而と月と嫌カニタレと筋カニタレ而と月と嫌カニタレ
筋カニタレ而と月と嫌カニタレと筋カニタレ而と月と嫌カニタレ
筋カニタレ而と月と嫌カニタレと筋カニタレ而と月と嫌カニタレ

かねて社主が御あわせ二月八月と候る各
かれと月とすまやかとおそれとてお坐工
音訓のほ論あり今アヨ音訓のめり
音訓と一ト人ナリと音訓と音訓と語音
空天のじきもとくして我ニテ音訓の用
ノテモヤ音訓と音訓の音モとて四月の
詠論あり左がと四月の音とあけとせと秋
あけと秋ナリと月と音訓を各句脱字とす
そと秋ナリと月と音訓を各句脱字とす
け各月ある音ととくと月と音訓ナリと月と

月と音と化のままととくととくと
例の音と音と化のほ論ととくとと
ぬ音の音訓也

△ 每一月と音と化の月と月

此音ナリと音と音ととくととくとと
の名ととくとて晩年ととくととくとと
せ毫ナリと音ととくととくととくとと
あくちととくととくととくととくとと
ふくじととくととくととくととくとと
とと月と月ととくととくととくとと

あひいては春の折逢て夏の月とぞ可
一月もあつて月の正月と秋のまつて月と
は今と他に月がある一一年めちじゆのほ論
をうよこども古歌より母かまと裁入て
ありえまあやとこれにままとひじゆ論
あれとゆる論といふ事もあらむとひじゆ
と向うとの通用から又たゞかくいふ事
月日年と般といふ事はかづれとひじゆを
一世の實譜ある一一日暮の江戸にて
いかせかどと云ひておねや

○二十九月記事

世ノ傳ふ源流の考ノ月記ノ指合あひて次の件
二月とやつて時と月と云ふと云ひあひて
三月と云ふと云ふと云ひあひて月記と云ふ
連能の家也と云ふと云ひ三月と云ふと云ひ
指合ノ處もと一あひてと貴富サ人との句
とあひてと云ひて時宜と云ふと云ひ宗近の
称也と一句と或とれ事のすりうちの句と
至りに懷集と載せる時宜と云ひと句を

かへも付へ今せ附方とすてひめの月とすて
（ま）せとそとす今せ附方とすてのち月とすて
お向づり月とひがくると月づらお向づかくま
と早急と例の二月三月とお向づかくま
月とあくつかま月とお向づかくま月と
前向づり月とひがくると

△ 掃地日せほづり不化めぐれか

△ 五せとそとれのうをとき前

あらわせざととととととと

と音の月せるとかれあ

はれのお向づり月とくまとよこ轟とす
よなまきま金とお向づるまと月とくま
よととモセ東とお向づり月とくまと
轟とまつと

△ 踏草てやる男麻のふの轟と

月と轟とあく一とまつて

け月と早急の月と月と月と附方と
一解や被つよお向づ金解と月と月と
向づくと廉の男あくとまつと
てとまつ轟と轟とあくふの轟と大詫と

次の月と號を改めまなければ附を
之等と號するにあらずかんひの號や秋
の如き月と「秋」の字を書入るゝ月も
之等と號するにあらずかんひの號や秋
の如き月と號するにあらずかんひの號や秋
の如き月と號するにあらずかんひの號や秋

未せばの事と申す時より軍を教
ちらへと申す時より軍を教
未せばの事と申す時より軍を教

ノ

さうや被つておれ月と月次口次の指令と字と
號よのうちれとけり是を指令と號向と右令と
道と句作と當用とありと二つの骨筋あ
てきとひづかくよしめおとしまむと申す附合
あくまうにげれ称もとふとさう未せばの事と
いふうの字せはあれは右分時の用は
ひりと畢竟と也經の敵對子と右桂の前の一宇
と左と右と左と右の格と序とありと桂や
そとへもとへねどとげれ称もとふと行ま
其事のふき名へゆと未せばとて左の釋

ヨリ老の經氣と取合する月の傷とちる
アモウの対合を神助とよー

△ テ物と云ひれて表すやう一きり

△ 行き度うとよー月也お

け附方と深懶の兩用アリテテ物と云ふと
トスルトナリテニヤウ月の附方ハシムカレ
キムアサヒの間セラレアルヘおぬくと挂め
キムヒアサヒヤシルヘキタクサセナセ可ヒ
キムレハミテヨリホトキア後ニふの凡例と
あくハモキと例のよき一方化あるー

○ 月の一まとめ見せ事

レ格とあゝ是チトナリ月のあれふうヽ或ヽお方
の指合ヽ或ヽ天象のま嫌^{マヘ}ト月が^{マツ}トアリ
アリ畢竟^{アリ}月^{アリ}よまと陰^{カグ}モ^{アリ}月^{アリ}
セ^{アリ}見^{アリ}はと深^{アリ}家^{アリ}ちばよみの家^{アリ}月
あく^{アリ}て月^{アリ}とかくも^{アリ}と

△ 秋^{アリ}や朝^{アリ}波^{アリ}日^{アリ}と

はらくねみ思^{アリ}て縁^{アリ}のと

娘^{アリ}の事^{アリ}と作^{アリ}神^{アリ}竹^{アリ}

まよふるを向て月の表合せられ
朝日が照つて月をもつてゆか
て是よりに指すは月と向て月の表
まで月とほまとあわねに娘捨の
名とやうて月の仲とゆくやらんや
と花といえ科と月とひしとくら
あくとくいきもゆてふくと田毎と不
きる山田の形容と称をくんやまくう
りてし事即とゆいえ科とりひて月花と名を
玉論あれとおせうつとうてねとに作者

の眼力とおもやうて月をもくと

むすめよしむかく　鶴林川

みやくらじせなむれ　又葉

くほとをもむくしよく
まよひとくと片巻くら

しおとせよ越の山は鶴川の二表と制
おとせばやうせたまくまくの二表
あくもれいに表のうれしませみゆく眼す
みる月をあくく月をあるよだつてこむる
傳あきしとけ表の花とやうて月と花と

兩詠とあるをじりてはあつま月と
古にとせしとてくの花とみるもじる
秋まきんとオシの花ふまつね
もとくいしめやうかとまつと一か葉せ例と
かうてはう月のふとちきうちと古事記
孟、歌ともさして月の名、名、月ひら例也
まくわくしげはう月とみとよまとじと
を秋と附るるにうらう日のてすとある
ゆに天氣のいはとくすく(き)やくわくと
とよ時とねあよハ月の例とあり

をとく月の詠とすと花とえ條あく月とハ條
あれとすと自とのんととくも、そほとせを
もとくとくとくして例の不得止(ゲラ)とすと要挙の様
れをと通つてあくへんせと好事の人あくと事と
新とりとあむとてほとく月ととむとあります
月ととくとく秋固のれ用りて例の和とく例の
第とく例は大和の名詠ちるともう一

○ 保永の序と舉句を事

我家承て舉句の控とつ月次かとまを能ば

ハ論事一或そ祝言、今もとつひ本と哀傷席
リよ時をかねむる近の翁向あれハ多難めを
とし家近ト、うきじすやあれハ是向レはぬ
きまき、花とあり、よ一々れハ或と一度の老人
ハ或と穀放のゆき者ト、うきじむト、一也
始終と謂ふ方えをもあると今モ能席ヨリと
奉向とすト、也御不とおわれて、又ヨシテ、其
事あるをも人じよと、と立ちまく、一早と、事有
リて、ひれわたり、ひるは、一種の能清ヨリと、亦
論事及ぶと云ふト、セキヤ保木の能清と云ふ

ハ独子も二つめのとくとく號へ名前をの肩と號を
とす一ノサム名前をモリ號子もアガリ號子
トテ漏れよなリモトモアシレト祝言哀傳の肩と
祝言哀傳の名前をモヒタモアシリ用ひるる
あれハ拳手口ノ脇の服トカツリモモモモモモ
トモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
時々モモモモモモモモモモモモモモモモモ
ア名前をモモモモモモモモモモモモモモモ
モ尾あれハルコトモモモモモモモモモモモ
ヨモモモモモモモモモモモモモモモモモモ

古今考略

卷之三

おはなごとくまもあつ年明治南洋新島より
あまくら
名句
七浦やてさかどと一ふり

△
久
句
七浦やア子のひとと一
番のハケ
モユリヅルハネ
ア

されど其は諦よけ翁の如きは實に譲
る事なくあり翁の才とあらざる名取と雜り
翁の如きは無く翁の才とあらざる名取と雜り
て而ま格とせよ一まことに翁の能と
尊らばやうるゝ者も又翁の才と
あらゆるやうに支配と(もとほはわんと例の
よゐだねの教をもあらきぢれと笑ひ其の實に

よろげやれぬのはなうねまほり一輪のふる
あくにうらやむ處のてすよどもうと南のめらひと
そらうらを定し家ゆのよよひよ處は眞の名詠
とかくもやけやうすきるかあらとよせとくの
ま直かくも角用せ角用のてあよとぞま

△
他謂之今人偏也。代也。

清風アリモトヨハシヒロノブ

以二連之五角之世用之也前之新陣三百弱

卷之二

真竹のあくまひにて竹の瓦敷の事ある
うちも我家のむねとちへ人偏の他階を有す
されとよきと風に頬面せ拍子にかせぐる事
一やせ用ありとよく後を被つて床張草下
木變化のゆれ曲筋にて名残の老とぞりあ
されに言ふてよしわの附合とめてあとの事
ぬと圓とされりおの一やせ用ありとよく
されは足もろと千葉あくら詫まくふとゆく
事ア今一やせの事とてくも年とて
モキセ用ありとよしも事ア百まで一やせ

○ 富余物名事

古御上至一七屏风の御舟の市井とよれ
さんあやあくらとよまよと用されともるくの年款
へある一木やほりて扇子合とくし桐の扇とくわ
と論あよ難よ用て高木よかあむと年款
ある一一年款とてうめき年とよよて

附句

白雲の玉せまさ名とよよて

△

折かくとねがほめは音信

扇のまま名とてうめの向やられとけふ玉華

八仙人草堂より至りては、けりて曉の書とぞううぬす
あれ、まを害しとぞの名同す。一、せんり指合と
くらねどもとみの句と桂の指合ありて、まを害
を當き、用かへまくねよに書の二まとあら
て後のは、せんりとまを害の附合やへるとあ
くとあらへぐる句作のものなりとよじ例
て千句一力章もしまつちある。

△
秋風よさめやあ葉とすみ色
簾とすくすす月れ
ゆふ轡む鈴もねえし

けね虫のやえと和漫と奇絶の句はせんりせ
よ韵字すみよ何くもとととと錯綜顛倒の足
とひいて論されはやえの。みありやもねいもと
あれはけりとよのまねく作る叶をね虫や雪と
鈴もねえし。とつよーれとねうとねえり
ありてやえこよ口合のやれーと遠慮きとーあくよ
ね虫もとつよーれと肴語もすとあくひて用
あきとすて、競倒のたと用ひぐる句作のと用
と称もーきせやとくいにけりよとよとへ香稻
喙^{スズメノ}鶯^{スズメ}鶯^{スズメ}粒^{スズメノ}碧^{スズメノ}梧^{スズメノ}棲^{スズメノ}老^{スズメノ}れ^{スズメノ}枝^{スズメノ}と^{スズメノ}すサ陵

各句也云れ顛倒の用と云ふを看候枝くひ
碧石指枝と云く粒と枝とへあましいて用ありと
りて顛倒のばとめらやキとゆく錯綜も顛倒
しあれとせむと云々とあるとレムセモうると
杜律の諸おも錯綜顛倒のばとのよひて
の細説と云うと見事に承るに接とくとけ鑑
の鑑鉢のびとくよつとくもや重も鈴も重いと
結語と云せ一とすとあつてとモトとけ鑑のせ有
フスル一とまよひも文にも句格もあらず新奇
と云ひじとほくとくとくと字と字と用せ用せ用あれ

今まづかくよつとくは格の用アリテヨウト
一とと句作のすと用とん達とくふの物語
ありえヨウト句作のちとすとあるとある

下

○平字平字諸比事

むづかくよつと字とて階の格と和深と音と字と
あれと所合とげ格と用やうへおもと能格と始
みやつともまゝおづかくの階觸とそつられ
○前句
ササヒ相木ノ
草と字とあづかく
草の字と字との様合とよづかく

是とあまの附合より武陵と名ふる也
はては附の字はけ附とお向ひのりがたと書れ
おかとすかへりかと讀むと書れ
けおもひの字と書てはあへりと書れ
ひ起居はくじよあらまれはけよ附合と書れ
のはたとあると今やは附と格例と書とて
くると子せ代えといもすけ附の通用にあら
のふはとあるとめりやうと同く併せふととも
ト心事ふと書くをひは達たよひの例あた
今世新制などとつひかくあるかくが蟹せ密

あく人の附合よ

△

ほそくあれとはすことよとま版三下

各をとづくへは取のあんと

け附合と名残の西あくじう各をとづくとよ
詞のあ向ひ對てやれととづくと作るの所
ははすとあるれひをくわとづくと名へりく
とづくかくきうとづくとあらせよとづくと
能活のやてよじるあれひをとてて活の様と
はすとあれとはかとづくと版三下

△

はすとづくとは取のふろを

やくと口説くもうとれとて重複の格とやかうも
まれへば比め他集としげ格とやあくもくとす
低句もくもくもくもくもくもくもくもくもくもく
1附くわくくもくもくもくもくもくもくもくもく
の拍子くちひあれはせんれどく鳥の音此へ打て
あくとあゆううるう付くもく低め論くもくもく
け格とむちホムスノ合せ一

○
藝向一工向作之大東中

中古を連説のみ有りし附向も起向と句作と云

差ふふされへ教ゆうべしを時あるまづあきよ
有しも詫くやまとよしひ秋行と越向と云ふ
工執中はあくア越向と生すアモ體とば
カ打卦より二三の事とてあるモ句作とな
リテ用と竊ひふ句の事とてあるモ句作とな
リテ是とて、前句と後句とよしむよか念
の控也。巧く也馬の類説によア曲節也か之様
也

けあると湖南の春らまでを専て一條の秘訓也
ある時ある者また在詔へたるを甚子う難詮集
と謂へて彼う辛崎のねせ論詔とされり。と哉と
の通用とあけり。あるるもくねのば文とあされざる
ハ許林の返答書にて御承諾新の事と似て
生じたはとあもとへにえのくねのむとくへど
も辛崎のまこと附より而てうしろとほへ哉と
そひとまととてト起へりきと「くね」の義説が三月
ハ正月にうり詠。うそくま秋の牛せ味舞あともや
をすうねとト清きとすと和琴とし偏ひとくもうち

ト「くね」のむとがモ益圓もや辛崎のねと
おひ和章とくわされひきとひあくもゆれぬと
ヒ曲節あるおと有りともう一トうけふと様
と口ほどあうとせあれどみおひとぞのとく
附もとかうト下様かくやト起向と附のとく
句作ヒ曲節ヒのと様より或ヒ真竹行ヒ
或ヒ不易流りヒとよろ目もキササ万客あは
ミヒ、ある人セフ空室とあそひて「風す第々空の宣
ム脇簾とア脱ヌキニと想とてやくと風
にとめく海のよせ傳ふこれハ例の起向ハ莫入

コトハカタの作と秋と接かあんうつ

曲

筑入の子に大名せ秋嘆

△ 節あへの子に隣く秋嘆

筑入の子をよけの秋嘆

や此様の句を作りて二種の實説とうかよに
あはて隣の萩と称りてゆきと大名
萩ゆとこれとけりと一対を能活あれと奇言
新詠となじきとあるとさう事と門の萩
さとやうねらすと余代夜詠とおもじく秋節
萩の此様と葉をうたひ筑入の子とせ秋と起れ

フと作ふ前のうよへはうりてすゆ一々わと起る
の傳を地と西とよほまれて奇怪と教ふる
まことに門の萩とすけ合ふる例の一例よ
人年ゑおやあゝりと耳同とがくむとくと隣
くよりひきとほれめぐりてほなの言あひて
信詠重詠とそあよとづる白鳥の遺訓をむ
うらんはまたう一他譜のせばあれ人よに
裏暖の用とあひて裏すと良服と云ひされ
い體とくとあくとむら節か一繕子論とく

きりあつてはねの本錦がさむよ一
とおもひるへん感ひるへんがわ

○附合ふせ名ハ所せ事

中唐子和歌や千歌ノト連歌をハ十歌とす
附合ふせ名ハあれとし歌と舞詞とすと
之とモ詠よ詠よ詠よ詠よ詠よ詠よ詠よ詠
の生なまく一牛千里せきまくとあつて名ハ聲
用ハ異ハあらどあるト一歌と舞門の能詠ハ
トセ名あく附方スハ歌あく名用をきく

十六條あくゆくタ累方セセ名トシキオ一と有
うひ石歌と余歌とりひ石歌と通句こつよ
白車とくまげこととて車方のとくとくあ
あくと和音七十歌と詠名あくうべ一歌ハ起怪
きづく向附うひ相手と色立と余歌の機机
ト一歌をもてとセ名トあれときり歌之「十論
」あく書化歌と余歌と一歌とくとく歌之「十論
」と對附うよ車方あれとくとく歌之「十論
」とて云ボの名トシキカク一歌とく
比あくうべとく名残の裏せ曲節ト

義いが功名ノあとおもひ

△ 親の住持も寺せ 表見ラモニセ

されば古の對附アツメとよも走るかえりとよ
て寄るに後アフタの禪と附アフタるとす對といふ意
對といひ後アフタの聯句アソシの前モリあわて今子親と
子れ對を町の義いの表店ラモニセよまやに檀の面マツヤ側
と對して全くよろはれと謂ハシメテの對とい
あくまでも例のうへといふもこれ「年中禪め
やまの年とひからむ害あんじとそと曲輪カツラ水
秘抜ミヅクとよづせよつて古の對附と今子歎

製の對附と仰アヒいなにゆきまれとある「
關附方アツメガタのハ被アヒと云ふとあるせも様をせ
衣食貪福アヒのぶとて云けて生アヒて有アヒのみ
附方アツメガタとある「くも場をあらせ夷洛アヒロ」あら
家内アヒとあらわむとてとて云けておらべて年取
の附方アツメガタと「一時合アヒモダ」と睡朝スイジョウとよある
ぬ晴アヒのあたとつアヒの晴アヒとまに秋アヒとすり
幕供アツメ五月の行事アツメとつけ二被アヒとま用アヒと
或と有アヒの附合アツメとあるて或と年取アヒモダの附合
とある「一ちるに財直アヒモダ」の被アヒと云ふ財の

風俗も、たゞ度よりの挙教と他説とを詰め、僅
あれ程一程、一回は附合もあり——「天相」と云ひ
て是を「天相」風と名づけ、假使よどぎて天相の靈験
詞と申す。おゆくと雖も用ひよう——「親相」
と云ふことを表す。而して月と云ふのも、ともいへ
の哀乐を以て親を以て月と云ふ。痛の言
ふ歎くの事とのし、便のおもむき親
と、あとは親を以ておもむき親おの向と、一種
と、頃じう附合あれ。二つとも同音である。
くねこ一からきことうニするある——「おもむき

靈實の事や、而れと云ふ親おもむきあつて、或は深岸
狭えり、或は軍書物語のまゝへきるい體と
ね言ことひ古代のあらわしと云ひて書く人
せ而あよびて、かむことある。されば、おせこ
三ノ八の合と云ひて、例の二十九ほど、一九十九と
みゆうと附り、おわくのをれて、よせかう
日よまとと、耳にひくねはねて、おのの事等や
て、おもむきとある。——「おもむき」
和焉のい店や、もとれ、ハ那の貞が、おもむき
つ附合あれ。——「ハ那の達林」と云ふ。

ひとまゝ同とゆきまへてほとにゆきとよむる
ほひうのせふ所着せ被ふれぐく教るよすを

一例のふまくみかくさもく

障よこゑのメロ らくばく

△ 齊敵をそれそと老の肩と渡い
けりに左のまほと意よするよまのよまと
ほきとそとタロのうのろひより障よに本行の
れどアホと門りとす年のはがとよ一これ
齊敵を我のせ作とやいりもとまれとしけれ
こちととくまとせぐて人のま取くまことあれ

ゆ齊のりくをとつよ(き)とや接まれハ世の背合
へ起程のあま方(ト)レシマフミ同とゆき
齊敵アホトドク作とれのちはくとすと先
の月ぬくとせもせつとせよにあうとほ
キムニ一年竟とせふ所着(ト)レ丁角(ト)ス
離附のニ妻(ト)リ室接の(ト)レ(ト)レ(ト)モ
おとし我家の今キヨ事方と附方せまふと
一(ト)の附合(ト)レシ時(ト)モ(ト)モ熱(ト)ニ(ト)の
も(ト)ヒと(ト)合せ次(ト)新(ト)の妻(ト)事(ト)次(ト)我
白(ト)ふと附(ト)レ(ト)の配(ト)事(ト)ト(ト)か

塔とあまくやうなまと有ひる金銀を但
直場の邊のうとせの當用とあまくやう聖
モ始とあま方とつりはらも塔のきからうね
よ真へう其場の所とまう天相う詔おの趣向
をゆくさうおの用と作るがよモのと附方と
ハシテ志れハ聖方と附方とモのとさよ先
事アテモ事とロイ附方とモアヒロミテ
スアガヒ二名一神トモアヒロミテ聖方と
モアヒロミテ対附モケリ空挽シ古たのちモハ
アヒロミテ今モ新製あれハモナハ附方

のをも時をかかれて實淨の多合ヒトヲ全
自己的方附とモアヒロミテモ

○ 懐常より各用件事

おも連能の「中」と「よと」を約とおのびら
「け」と「け」をわざへやうとひ直やうとつてされ
ハドヒトアヒ百物トキのせ差ふと一往十度
のちのとて吉婦の用捨あるがや、同「百物」
ハ新リてめ新を表とひと多くも重とす
句とニシの折を表す裏もあくやうと

あつまひにゆの折を表すと云ふを實して
ハラミあまめ姑と娘の妻おうアのひをもと
ソムク名族の折とソウルハヌホの祖
ミヌトモスケイハ懷印のスル表
ト面めち婦よ軒重比差ふとモモセテ次
ヨセ十二條とモモモ朝と云折ユキモモモ
の裏とハコロモモモモモモモモモモ
セ十二氣候とモモモモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモ
モモモモモモモモモモモモモモ

よと例のよ倍のあくを紙を祝言のひと
以てもう手は各同の用意ありけると十八歳の
歌合よりそれを後へと手はとくにまことく下
の句とあくをてこすらむの名とあくをてかく
月花も二折のまあれとう十二句とせりされ
今式もと二花二月のまほりや式の遺訓よ
否否もと一月尾也と一月の時宜ありや或は年納
の法氣と被り或は歲暮歲旦の賀もへ船渡と
さあするまでもあるまとうと少しハニヤリと轍を
そ尾と合きて月花の二度をかくせ損ねよ

右はよとえ格にて或は一折うやじ時
あくをうやと云ふの論よあくをモヤしてせを
とあくをせ但ひも長短の二行を取る後
の新制裏にてやオトを求約の用あり短章よ
ハ時宜の音用あり求約の下にスル

○求約の能誦と向あせ事

室よ他階の求約口とがぞ奥儀おのけ口と
かくて和音せ頃は一效一方やあうれも上げて
ぬるの生前よか所ありて武のまきと覺葉

あくと底とひ遺草の余とすねてせ蓮社のたまに
と宿されしと貴蘭へあはきりとせめ事
あすてやこわら義とそれよりよに求約のす
ハ作詩のせばよも用ひも論とも好事のいた
と仰れど和琴連歌のやうらひは漫和とい
求約といひすしてちるを餘力あれべと滅ねの
門生ととけぬであから求約のふとえす
よ清と絶らうり律清とくじ假名の一韵と用ゆ
一作と歌行類をせんとまかすと換韵の格
あくね二約す子すて自由あくとせぬと今よ

ハ長歌行といひ短歌行とよニ下の名目と新製
源氏行と享化行とくじ「くじた式の名目あく行
のてすと医のうへ韵と行やうとよそより歌行類
トあく一色但づらじ長享短享ととく享は風流
に名とあくひて古例よりれうとよ一毛せあらに
求約の能詣とけよまくよりみわらと換韵の用
フ六々の時と二約でまくハ六の時と二約みよ
同約を組一約と全くくとく同約と同よハ兼約の
差ふよろ一それとく和深の旧例うつてみほ
求約の序説とあり和深又操よまくを命

されり今つ長歌行を全く東方式の新製
あるうオートを換芻の持つて百韵も又十韵
一韵十句のよハキと用ひい假名とすますて
不自在あしやつてせきとく令かくまれと
今セハタとくらやヰテと連れの名取と
トハタの能活あんじゆうとも尋ねのたにあれ
ハタヨリ裏と十六句トニ折つて四十首
あれハギ用ハまくるアヌ十韵とがつと月光
七角のちの日あわせと花をと但十又八日也

主ふと古たよからずすあ一例と短歌行と長歌
と對する長歌あり表とてるよて裏とハタ
ヤニの折れ表とハタよてこ裏と例のやうせ
げぬハタ六カドモアテ生と換芻の用あく短
歌とよ時と一例の一折れんとく物と始終と
さあくじらゐやうと井戸の水と水と二を有
の者にすあれハ月花の設を勿論とて其秋
えは冬のち種とこち去れ有略あつまくや
ほせ行とひそひそ行といひやとり六を有す
あれとほせと來物のきよとくに付と長歌の

六ハと用やくへ早船と短舟を承約の船とよ
（早船も右の江舟と承約の船を承る）接
まれて承継の通用にて船荷の手向とばせ

○ 同まよと句まきやせ事

むづりおたじの港宿し同まよとく去れ室に
あれとみるはくわくみゆきひりてうるはくわ
くらうけ（きく今世能活の者によま秋へう
るよかまくえまことうらうあれとくらう古事
のまよ節のあまくえよ例めちねやうわう百韵

のれをせうふボウヘ運車の船とつはよとす
あくとゆくとまよとまよと白船を
うておなむ害あんし今つよ早船と短舟と
月花のれをせうふせうふ月花の船や角
それと早船と短舟と白船とあんしと宝祥のに
せれと早船と短舟と白船と例め行人全
ゆつておなむ害あんし今つよ短舟行の二花二月
へ論とよまよとまよとま秋のまよとくとせ
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

はれと翁の服オシマセドミヤカニ考キモ用
ヒシヒナメ配ニ寄アタレハ基秋ニシテ
ミシキエヌミシテホテニテルミシテ一月花の秋
テ基秋ニシテルヒシテトシトアタレの配ニ寄アタレハ
ミシキエヌミシテホテニテルヒシテ一月秋
ミシキエヌミシテホテニテルヒシテ一月秋
トアタレヒシテホテニテルヒシテ一月秋
基秋ニシテルヒシテホテニテルヒシテ一月秋
ホテニテ寄ほのち驕ヒツヒツセシヤ連続の
宣伝ヒホヘテ基秋ニシテルヒシテ一月秋
名聲の裏セセル月秋ヒホヘテルヒシテ

ト基秋ニシテルヒシテ古例アタレハナツヨキの者ハ
ヨシニテラクシテルヒシテ月の命は秋ヒツヒツテ音節の例
ユトシテトヨ一月花ハ音節の命ミシテトニテ鐘
の音はあんヒ全くせりせ私ヒツレモ古制の
例のあくまでトヨ一月花ハ今より執行の事者達
ヒシキエヌミシテホテニテルヒシテ用ひるヒシテの
自在トシテ用ひらヒシテ前ヒシテ不自在ヒシテ
ホテニテ秋ツキ東方ヒシテ月ヒシテ二月の設
同月ニシテラクシテ月の命ヒシテ各月ヒシテ
條ヒシテ秋ツキ東方ヒシテ月の命ヒシテ

話とて或も用ひの家説とて遺稿には
くよからずて今よまの凡例とみてて古世の
ほどいところじとを用ひておみの滅活よ
りうて東諸西詔の日用とをくらて當時
よこに右の抜論と竊ひて承く所とけん
きとそそぎと弟子せむちう一 されど吾
へ多学而識えあくも例の一以貫とつる
百篇一章のけりと見て千未万にの節と若
ひもく者を主とす角とあくもみをと例の
有用とゆよ一をう一刀兩断の場もる矣

15をつけて一冊をかねて取尋のこととか
7一冊に一例めは又あれとわざと自己比
古也あんじへはよ抜論の序とあがきを
例と云ふの實はより一世の實議と云ふく
用れと一古也の御意とぞおぞるゝ事也

東考式卷之五終

能詣有とあ

跋

渡部杞

「由へ孔子の靈詔」子夏向れ子曰、顏回之死人矣。若子曰、回之信賢於丘。乃至于子路之死人矣。若子曰、由之勇以是於丘。子夏敬顰而向曰、然則四子何為事先生。子曰、回能信而不能文。乃至由能勇而不能怯。弟子四子者、之有以易丘。弗與也。其六所事、吾也。云、あれへ子路も顰回もれ子となざる。

右を真言うところの辯詐とはまた勇あるところの憶病うて終ふれ子と云ふよあて定められと瞻前忽後と讚へて顔回ひどくとよく知れとも情哉不幸短食うてれ子のとて付づまととつよ角へおもへく今せ能價どよら齊楚秦宋漢のじうとう二千余歳の風雲と押へてようともくせうとく断じてり箭斬アトさくと人間の常情の虚とくろい室とぞかへ虚実のちやくとよ遠よみあつてちよと武陵の芭蕉の身を投子一碗の茶よりよらう

ア能活の虚實工自在とゆるより能信あれ
し信とぞとせやとて能勇あれとも勇も不こそ
きとくへ能呪の親とぞようそくも徒とす
人とえひ弟子セナヒツクわとあくわは等
日奉テ余卅ニモシムと移ミモトアヌキ
哉れキテ性の天マカシヒテ人の及スル不あれ
アリテ能活と信談事詮アテヤモスル
不いシヒトテヨウムキ信談のヤクムハシキ
事活アテ日能アヤモスル能あんと教シされ
尼入活の耳アキタリヒミセの向はアリテ

或と長く或と短くキミキ自由アリテ
「りんからを痛とありてとのれとすゆか」と
アド余不の耳ミヘ虚ねやモキモ白集の
詠シロアモ一トキアホと云に能活と云
キノねねと云に能活と云キノ能活アリテ
俗ヨリテ能ア常アツクとスルカアリテ
大あきラクナケ事とおれ能尾の詮アテ能活
一種の優言アガシテアノ及スル不あヒトヤ
ヒルユケホト人の及スル不とあギテ此ニ元
の対語アリ遠く一世の対談と寧ヒテ

更に古世比附監を行ひあれ奉

享保庚辰二月日

書林

京寺町一條

野田治兵衛

俳諧書籍同錄

狮子庵遺稿

本朝文鑑

假名文集
全 十卷
假名真名文

和漢文操

全 七卷
新古評論

俳諧十論

全 三卷
十論秘譜

十論互辨

全 二卷
日本助語辨

新撰大和詞

全 二卷
大和真名文

和漢百花賦

全 一卷
角撰真言式

俳諧古今抄

全 五卷
大和真名詮

論語先後抄

ウラ又